

二十六日 25 土 北緯三十三度四十五分 西經百十里 行程百十里 英里二百三十三里 是は我里に當る

二十五日 24 金 北緯三十三度三十分 西經百五十里 行程百五十里

二十四日 23 木 北緯三十三度四十五分 西經百十里 行程百十里 英里二百三十三里 是は我里に當る

朔六時品川出帆。

二十三日 22 水

川崎道民

榎竹内下野守 榎松平石見守 御言 景極能登守 榎柴田貞太郎 御勅 且高圭三郎 御徒 福田作太郎 御夜 品樂太郎 岡崎藤左衛門 御齋 高島祐啓 御授 益貞駿次郎 御授 上田友助 御徒 森鉢太郎 御福 福地源一郎 岡立廣作 岡太田源三郎 御齋 藤天久之進 御外人 高松彦三郎 岡山田八郎 方 藤 松木私安 岡築作秋坪 師齋 川崎道民

同行の人員左の如し。

戸に来れる者なり。船の長さ二百十尺、蔡汽機關五百五十馬力、大砲十六門、兩輪火船なり。○今般歐羅巴え 正午芝田町上陸場より乗船。英軍艦「ライオン」を乗込む。此艦は日本使節を送る爲めに英政府の命を以て江

同二十一日 21 火 北緯三十五度四十分 西經百十里 行程百十里

文久元年辛酉十二月廿日夕七ツ時西航の命を蒙り、

【註】文久二年幕府の遣歐使節に隨行してヨーロッパ諸國を巡遊したときの日記である。福澤の自筆本は二冊から成つてゐる。今「西航記 豊芳閣主人」と題したその前半のみが残つてゐる。しかし他に数冊の寫本が知られてゐる。後此比較すると篇明後に自筆本に加筆訂正して寫本を作らせた跡がわかる。こゝでは差支ない限り自筆本の例を残すことに努め、「二三の寫本を参照しその相正をも採り入れて本稿を決定した。】

### 西航記

萬延元年五月

福澤諭吉

【註】この文書は寫本から採つた。察するに、解釋が最初の洋行から歸朝したとき、藩廳か或は藩の宣職へ送出した報告書の寫であらう。筆蹟も推測で誤謄もあり且つ所に判讀し兼ねる文字もある。】

以上。  
々々欺紀行相認候積りに罷在候。滯留中英國の裁判所も承り候義御座候へ共、此儀委調は口上にて可申上候。

右は今般「サンフランシスコ」私滞船中より「ハナルラ」滞船の節見聞仕候處、極々荒増申上候。尙又道

「近來は追々文字も開、土人も童子にて英書を携へ學校へ出入致候者夥敷有之候。

指にて撮み食ひ、箸七の類一切用ひ不申候。

「常用食料は水芋の如き物を湯煮に致し搗き極き糊の如くなり、魚類獸肉等取り交へ相用候。都て食事致候に

利加支那人のみにて、土人の店をひらき候は一々所も無之。

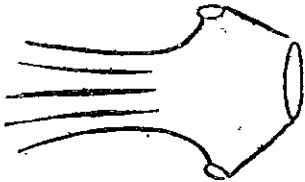
「人物極て鄙陋、全く白人に制せられ、島内にて賣買拵致し候は「<sup>ロコ</sup>羅呂米

「男女共蹠跣にて、男子は筒袖、婦人は圍の如き物を着し申候。

之候。

「人種は黑人に候へ共、全く「フリカ」人の様子にも無之、「モンゴ」人と「ネイグル」人との間にて有

「氣候は餘程暖氣にて、極寒六十度、極暑八十五度、雪抔降事無之由に御座候。



去年來各英國內亂あり。部内南北に分れ、南部頻に利を失ひ、由て救を英國に乞はんことを謀る。偶ま英國の  
官船米利幹に碇泊せるものあり。乃ち此船に託して三便を英國に遺る。北部の將軍此の事を認知し、軍艦を遣

香港に在り。初香港に着せしとき、變動新聞紙を得たり。紙中云々、近日英米の間隙争あるべしと。其故は  
十日 8 土  
九日 7 金  
香港に在り。  
兵備甚嚴なり。局の士人に問ふに、香港常備兵三千人なりと云ふ。

香港に在り。上陸して病院を訪ふ。本港病院三處あり。病院より返り、歸路英兵宿衛局に行て局内を観る。  
八日 6 木  
七日 5 水  
香港に在り。  
家なく、家族共に此舟に住して家となせり。猶本邦瀬戸内の漁者の如し。

商船四隻あり。○香港の士人は風俗極て卑陋、全く英人に使役せらるゝのみ。或は英人と共に店を開き商賣す  
ものあれども、此輩は多くは上海廣東より來れるものにて、元と本港の士人にあらず。又港内に小舟數千あ  
り。英人之を「チャイナ・ボート」と唱ふ。長さ大抵二十尺餘、中之に稱ふ。其數甚だ粗なり。土人此舟に乗  
り、或は釣漁し、或は網を以て水底に落たるものを拾ひ、或は食物雜貨を賣て生産を爲す。而して陸上別に住  
1「和蘭に「カンキール・ボート」と唱るものなり。現今香港にあるものは大中小三等あり。第一等ボート、蒸氣機八馬力、乘  
船五十八人。第二等ボート、機四馬力、乘船四十人。第三等ボート、機三馬力、乘船二十五人。大船は或は三門或は  
門二門あり。○英國三等ボートは二隻あり。二十隻、商船三十隻。佛蘭西の軍艦は碇泊するものなし。唯だ  
四門を備へ、四門を備へるものは六十八門、三門、二門、一門あり。

文久二年壬戌正月  
元日 30 木 北緯三十二度二分 東經百二十九度二分 程三十三里  
朝四時出帆。  
二日 31 金 緯三十二度一分 經百二十六度四十分 程八十八里  
三日 F.1 土 緯二十六度四十分 經百九十五里  
四日 2 日 緯二十六度三十分 經百八十七里  
五日 3 月 緯廿三度十五分 經百七十七度五十分 程二百三十里  
陸地漸く近く、交那人の大小船、往來するもの甚だ多し。  
六日 4 火 緯三十二度三十分 經百八十里  
朝十一時香港に着す。○寒暑針七十二三度。○本港碇泊の船、英國番船<sup>イ</sup>一三隻、泰氣艦二隻、「ゴンボ

朝長崎之港。上陸し、山本氏を訪ふ。朋友長與尊齊、結城玄英、其他京師の際にて交りたる知己二十餘名に  
遇ふ。  
三十日 29 水  
長崎に泊す。

二十七日 26 日 緯三十一度五分 經百〇九里  
二十八日 27 月 緯三十二度二分 經百二十四里  
二十九日 28 火 緯三十三度四分 經百二十九度四分

り英船を路に要して三使を擁にして歸る。英の船將隨て此事を政府に報ず。政府怒て使をワシントンへ遣し其無禮を責めしに、ワシントンの大統領大に驚き、忽に其所擒の三使を南部に返し英政府へ罪を謝し、事既に平げり。○右は去年十一月の事なり。ライオンの船將本港に至り初て之を聞き、事既に平げりと雖ども、爾後の景况未だ詳ならざれば、不日本港に至るべき英國の飛脚船を待て開帆せんとす。○右の故を以て食料石炭の備は已に便じたれども尙香港に碇泊す。

十一日 9 日 香港に在り。

十二日 10 月 本國の信船未だ至らざれば、碇泊益々日を経るが故に、乃ち開帆に決意し、晚傍五時香港を發す。但し英米の助諍未だ詳ならざれば、若し海上にて米國の軍艦に遇ひ事あれば即戦はんと欲するなり。

十三日	11 火	總百九十四分	程百四十五里
十四日	12 水	總百三十六分	程二百十里
十五日	13 木	總百十三分	程二百二十七里
十六日	14 金	總百八分	程二百四十三里
十七日	15 土	總百六分	程二百三十五里
十八日	16 日	總百四分	程二百三十三里

夜六時半、船中に令し、盡く燈火を消し、火藥庫より彈藥を出し、大砲の砲を撤し小銃を集め、全く戰艇を爲す。蓋し新嘉坡港漸く近き、米艦の砲あればなり。

十九日 17 月 總百四十分 程百五十里

朝第五時新嘉坡に着す。第一時上陸し馬車に乗り旅館に至り、夜本船に歸る。此地氣候常に熱し。大抵八十三四度なり。草木よく繁殖して四時落葉なし。土人冬を知らず。○新嘉坡も英國の所轄に係る。人口十萬許にして人種三に別る。第一土人三萬口、第二歐羅巴人二萬口、第三支那人五萬口、最も多しとす。蓋し支那人の此地に移住するもの多きは實今本國の亂を避くるなり。○新嘉坡も全く英國の政治に服従すと雖ども、土人の勇悍にして才力あるは支那人の右に出づ。○旅館にて日本の漂流人香吉なるものに遇へり。香吉は尾州藤那小野村の舟子にして、天保三年同舟十七人と漂流して北亞米利加之西岸「カリホルニア」に着し、其後英に行き、英國の戸籍に屬して上海に住し、新嘉坡の土人を娶り三子を生めり。近頃病に罹りて舞臺の爲め十日前本港に來り、偶ま日本使節の來るを聞き來訪せり。余仔細に其面を認るに、嘗て見るに及ぶ者たる者如し。由て之を問ふに、九年前英國の軍艦に乗り長崎に至りしことありと云。即ち安政元貢年余長崎に遊學の時なり。○香吉支那の近況を説くに、去年七月咸豐帝殞し、太子位に即き、同治帝と云。年七歳なり。内外の事務は盡く帝の叔父恭親王に委任す。去年英佛との戰爭は事既に平ぎたりと雖ども、長髮の賊勢益々盛強にして、方今其兵員殆ど二百萬に近し。南京を根據と爲し、江西江北蘇州を陥れ、尙ほ進て北京近傍に迫り、行々諸方を侵擄し、男子年十五より四十なるものは捕て兵卒と爲し、兒女老人は或は捕へ或は殺し、遇る所盡く火を放て家を燒き、田野を荒らし、北京の邊六百里の地は全く人煙を絶つ。○英佛の兵は上海に屯して兩端を持ち、取て賊兵を撃たず、亦た北京をも救はず。蓋し他の勝敗を見て事を謀るなり。長髮賊は進て上海に至り、兵一萬を以て之を圍めり。土人皆恐怖して家を捨て英佛の軍艦に遁れり。然れども賊兵亦た英佛の宿兵には敢て害を加へず。○長髮賊蘇州を侵擄し、男子の兵卒となすべき者を捕れば其面に烙印し、再び歸ることを得せしめず。官軍も亦

期日 29 木

朝七時巴厘を發し火輪車にて第一時「カレ」着。カレは佛の北岸にある一港なり。人口二萬。外國交易は甚だ繁盛ならずと雖、政府の運上所あり。海岸には砲臺を設け守備甚だ嚴なり。

二日 30 金

朝九時カレを發し佛政府の小艇艦カレに乗じ、第一時英吉利の南岸ドーガルに着。カレよりドーガルの海路二十八里。ドーガルの旅館にて午食し、火輪車にて夕第六時勸助へ着。旅館はブルック・ストリートの名カラレ・ジホナル館と云。

三日 May 1 土

各種外記  
御手當の御沙汰

四日 2 日

五日 3 月

六日 4 水

七日 5 木

八日 6 金

キングスコレージ病院に行く。院の装置は巴厘の病院と大同小異。唯英にては病院等を建るに政府の出費を以てするもの少く、大抵國人會社を結て建るなり。

九日 7 土

テレグラフ局に行く。

十日 8 日

十一日 9 月

第一時三使節外國事務ミニストルに謁し御國書を出す。○去年冬フランス・コンソルト死したる女王スコットの王に就りて喪に居る。コンソルト死後女王哀感太しく、一室に閉居し絶て人に遇はず。故に今般使節も遂に國王に謁見するを得ざりし。

十二日 10 火

十三日 11 水

トクトル・チャナムスと共に Saint Mary's Hospital に行き、歸途チャナムス氏に過り、茶を飲む。

十四日 12 木

十五日 13 金

江戸に事變ありしことを聞く。

十六日 14 土

展覧場に行く。○展覧場は英國にて去年より切を起し、今年第五月一日朝早本初めて開く。此場は萬國の製作品、新發明の器械等を集め、諸人に示す爲め設る者なり。歐羅巴、亞米理加、亞細亞諸邦より皆英國々産する所の名品、或は便利の器械を送り、且器械は其用法を示す爲め職人も來り、或は蒸氣機を以て棉毛を織ぎ布を織り、藥品を以て夏時水を作り、大蒸氣機を以て水を派吃す等の仕掛け、皆場中にある。其他新發明の火器、精巧の時計、農具、馬具、藝機、船等の雛形、古代の書畫名器等、枚擧すべからず。諸人之を觀て、買はんと欲れば、直に展覧場内の物は得べからざれども、其物を製する者の所より定價を以て買取るべし。○場中の一

局に日本の品物を集たる所ありたれども、物の數甚少し。唯漆器、陶器、刀剣、紙類、其外小細工物のみ。其中に肥前通用の銀札數枚あり。日本品は外國に比すれば其數甚少しと雖ども、總品物の價二十餘萬兩なりと云。

○場は龍助の真北にあり。巨大の石室、屋は玻璃にて覆へり。故に巨大の家にて各處に多く窓なしと雖ども、室内甚だ明なり。○展觀場に行き物を觀る者は、人毎に一シリング日本幣十枚に當りを拂ふ。大抵一日場に入る者四、五萬人、現今は歐羅巴諸州の王侯貴人富商大賈皆來て展觀場を觀ざる者なし。龍助府内の旅館、客を入れるに足らずと云。

〔註 自筆記錄には凡に「展觀場に行く」とだけ記され、「○」以下の記事は別紙に記されて本文の間に挿入されてゐる。前掲の「此分他に入る」と記したものに類するものであらう。〕

十七日 15 日空

ゼーアムストンネルを觀る。グリーンウァッチェの天文臺及海軍局を觀る。

十八日 16 日月

ゼーアムストンネルは龍助有名の大土工なり。テームス河は龍助府の中央を半折する大河にして、此河に七大橋を架す。或は石橋、或は鐵橋、上流より計へ、第一ウァーリクホルム橋、第二ウァーリクホルム橋、第三ハングルホルム橋、第四ワートルロイ橋、第五グラツキアトリル橋、第六サウスブルク橋、第七ロンドン橋、是なり。ロンドン橋の南は外國交易の運上所に在る所にて此より下流には橋なし。此河には日々數百の河船上下し、皆風力を藉らず蒸氣力を以て往來す。然ども船の稍や大なるものは橋下に至り船の煙出しを卸し、或は間帆前船なれば橋を倒さざるを得ず。ロンドン橋より下流は漸く河口に近くして船の往來も多く、橋を架すれば船往來の妨たるを以て、千八百二十五年グリーンネル名なる者あり、河底を穿ち地道を作り橋に代んことを企

て、大土工を起し、水底より下十四、五尺にして地洞を穿ち、洞の中五十尺、高さ四十二尺、鐵瓦を層々、圓井状の長洞を成し、此洞を往來して河の兩岸に通ずべし。洞の上は數丈の河水、船舶往來し、人は水底の底におり。奇觀と云可し。此工を初めしより河水再洞内に侵し、其間工を休ること七年、千八百四十三年初て成れり。

成工に至るまで四十六萬ポンドを費せりと云。一ポンドは本邦三兩に當り

〔註 この記録も自筆記錄では別紙に記して挿入されてゐる。本来ならば十七日の條に記されるべきものと思はれるが、總本では十八日の條に記入されてゐるから、こゝでも總本の例に従つておく。〕

十九日 17 日火

森山氏シエまで至ると聞けり。

二十日 18 日水

二十一日 19 日木

ポクトルチヤンブルスと共にキングスコレージュ學校に至り、夫より奇理院に行きポクトルジョンを見る。

〔註 以下の記事も別紙に記して挿入してあるもの。總本には右の記事を缺いて以下の記事だけこゝに書き加へてある。〕

グリーンウァッチェは世界有名の天文臺なり。世の航海者東西經度を定るは皆此天文臺を本とす。此所に海軍學校及び老年の海軍士官水夫を養ふ官舎あり。學校には少年八百餘人、大抵十二、三歳より十七、八歳、各航海術の一科を學ぶ。學校及老士官水夫を養ふ費用は、往時より外國と戦ひ勝とき敵より奪取たる物を賣り、又士卒の分取したる物は其物の價百分の五を政府に納るを法とし、此金漸く増加して當今は其利心を以て足れりと云。

二十二日 20 金

【註】自筆本には以下の記事は別紙に記して挿入してあるが、原本ではこの日の記事は「醫師チャンプル氏と共にキングス  
ムレーン校に行き、又富院、煙院、戲院を觀る。別冊に詳なり」と記してある。二十一日の記事の冒頭は自筆本にあ  
つて寫本にはないものであるが、その邊に傳寫の遺風があつたものと思はれる。』

養煙院は煙子を教ふる學校なり。教師六、七人あり。都下の煙子百餘人を集めて語學、算術、天文、地理等を  
教授すること尋常學校と異なるなし。其法、初て院に入る者は指を以てアセの記號なすを教ゆ。次で唇舌齒喉  
の運動を見、或は之を觸れ、其運動の機に倣ひ、聲音を發すること學ばしむ。已に聲音を發することを學  
べば、他人の音を耳に聞く能はずと雖、唇舌齒喉の助機を見て其語を解し、共に談話するを得。一女子あり。  
余之に問曰、how do you do 堅に應て答て曰、very well thank you 又問曰、how long have you been in this  
school 答曰、ten years 其辭此の如し。

養盲院の裝置も大抵養煙院に同じ。盲人に讀書を教ふるは、紙に凸の文字を印し、地圖等は針にて紙に穴を穿  
ち海陸の形を畫き、指端にて之を觸れしむ。算術にも別に器械を製し、算木の如きものを專用す。其外盲人の  
學ぶ事業は、音樂、織物、或は籠を製す。織物も多くは粗にして、鋪物等に用る者なり。婦人の手職は皆メリ  
ヤスを造る。盲人の造れるものは大抵官に買ひ、餘あれば亦市中にも賣る。養盲院に入るものは長少を論せず  
教授すること六年を限とす。此間學術技藝を學得れども、貧にして語計なき者は尙院内に留り養はるることを  
許す。但し年限外、院に留る者は、手業を勤ざるを得ず。○養盲院も他院に同く富る者は學費を拂へども貧者  
は其費を出さず。○院の總督をジョンソンと云ふ。余殊に此人と善し。

養癡院は都下の發狂せるものを養ひ治療する病院なり。患者一人毎に一室を興へ、晝間は室より出し院内を  
歩行し、或は園に遊て花を採り、或は院の楹上に歌舞し、糊を遊び、或は繪を畫く者あり、或は音樂する者あ  
り、皆其意に任て遊樂せしむ。院内殊に清淨にし、他諸病院と異なり、各處に小禽を飼ひ、鉢植<sup>鉢植</sup>ものを置<sup>置</sup>く等  
都て人意を樂しむるを主とせり。此院は發狂人を療治するのみならず、或は狂心にて火を放ち家を燒き、或は  
人を殺せる者等、皆此院に入れ終身外に出るを許さず。本日此類の狂人三名を見る。一人は女王を殺さんとし、  
一人は其父を殺せり。一婦人あり、自から三子を殺せりと云。

二十三日 21 土  
二十四日 22 日  
二十五日 23 月  
二十六日 24 火  
二十七日 25 水

キリストタル・パレスに行く。此日女王の誕生日。キリストタル・パレスは玻璃宮の義なり。玻璃宮は觀動よ  
り七里の地にあり。火輪車に乗り、坂ミニエトにて達すべし。此宮は舊との馬場なり。千八百五十四年之  
を建つ。廣き凡本邦の五萬五千坪、高さ二百尺餘、屋壁盡く鐵柱と玻璃を以て營み、絶て土木を用ひず。宮内  
に萬國の珍奇物を集め、諸人行て觀るを許す。宮外は盛に園を開き遊覽の場となす。花樹を苑へ、又大蒸氣機  
を以て飛泉數百を作り、泉の大なる者は騰飛すること二百尺、佳時言日は都下の士女皆來て遊覽す。本日遊  
ま女王の誕生日にて遊人甚だ多し。

二十八日 26 木

二十九日 27 金  
三十日 28 土  
五月 29 日

タラエルの武庫を観る。武庫はテラス河の北岸コンドックの近傍にあり。此庫には大砲の外都て軍用の物品備はらざるものなし。小銃劍、士卒の衣服及飲食の器具等、一々用惑し、事あれば即時に輸送すべし。小銃の數十八萬挺、他品之に準ずと云。

二日 30 日

森山瀨側氏着。

三日 31 日

〔註 このあたりで週目の記録の誤りを發見したのであらう。これより以後週目の記入がなくなつてゐる。〕

四日 1 日

コンドックに行く。ボックは、河畔を堀り池の如くなし、水門を造り、河に通じて、船船を入れ、池の周圍にエンテレポット鐵のを建て、船を近く岸に着け、荷揚げを便にするため設る者なり。テラス河畔にボック五所あり。第一カイヤインボック、第二コンドック、第三コムシルボック、第四ウエストインチャボック、是なり。コンドック最大なり。廣き百エコル、船五百隻を納るべし。周圍にあるエンテレポットは二十三萬トンの六十餘の物を置くべし。千八百五年之を造り、四百萬ポンドを費せしと云。都てボックも皆商人社中の所持にて、政府は定限の税を納るなり。

五日 2 日

六日 3 日  
七日 4 日  
八日 5 日  
九日 6 日

テレグラフィ通信局に行く。觀動府中にテレグラフィ局十餘あり。此局最も大なり。機器七八十。英國内地の方又た外國をも通ず。國內に通る機器を取扱ふ者は皆婦人なり。一室に機器數十を設け、一機毎に一婦人が別坐せり。又た一装置あり、フネウマタク・アパレチエと名く。空氣の力を以て書翰を送る者なり。三四寸徑の鉛の長管を地下に埋めて陸方に通じ、蒸氣機にて管内の空氣を排出し、書翰を送るには、管の端を閉て管内に投ずれば、氣の壓力にて瞬間に數里の地を達す。此法は未だ他諸邦になき仕掛にて、唯英國の新發明なり。

〔註 この記事は目録本には目付のみで何の記録もなく、別紙に「觀動府中に云々」の記事が記されて挿入されてゐる。寫本にはここにこの記事が掲げられてゐるが、或は前月九日に記さるべきもの記入かとも思はれる。〕

十日 7 日  
十一日 8 日  
十二日 9 日

ウールキップチエに行き、アルムストロン砲製作局を観る。ウールキップチエは觀動橋より十二里。朝十時旅館を出、午後四時まで局内を周觀したり。此局は近來專アルムストロン砲のみを製造し、海陸軍用に供す。大砲の數七日毎に三十門を造り、三年前より持續すと云。

十三日 10  
十四日 11  
十五日 12  
十六日 13  
十七日 14  
十八日 15  
十九日 16  
二十日 17  
二十一日 18  
二十二日 19  
二十三日  
二十四日  
二十五日

再びテームストンホルムに行き、驛路セントボウル寺院を觀、又ダグリックミューゼムに行く。「シントボウル」は英國最大の寺院なり。院の高き四百四十七、東西五百「フット」、南北二百五十七「フット」。堂の頂に登れば觀動府中一目下臨すべし。堂の下は地を掘り窟を設け、窟中に古來國王及名將の墓あり。「カビタン」ネルソンの墓も此中に建てり。

十五日 12  
第一時旅館カレッジを辭し、鐵路場アリクエイルス・アルマスに至る。即ち先月朔日初て觀動に入る時トールより蒸氣車に乗り着せる鐵路場なり。一時半蒸氣車に乗りケイルキップチュムに至り、和蘭の迎船「フルヂョム」に乗る。船の大き六百トン、蒸氣機五百馬力、船將ベルス・レーキ、即ち數年前長崎へ來り航海術を傳へし人なり。其他本と出島の館司トクエルキエムルス、及びホフマン等、使節を迎るため船に在り。ホフマンは荷蘭の醫師にて嘗て日本を來れることなしと雖ども、此人日本語を學べるを以て使節隨扈の役に命ぜられたるなり。○此夜はケイルキップチュムにて船中に一宿し、翌

第十時艇を起しテムス河を下り、翌  
十六日 13  
拂曉「ヘルフレントロス」に着。ケイルキップチュムより此地まで海路百六十里海路第十時荷蘭王の御船「レライ」に移り、「ヘルフレントロス」より「テムス河を溯り、「ロツテルダム」着。「ヘルフレントロス」より「ロツテルダム」まで八時行、同所着は大抵十二時なり。岸上には「ゴウダ」の歩兵「バイロイス」より「ロツテルダム」まで八時行、同所着は大抵十二時なり。岸上には「ゴウダ」の歩兵「バイロン」排列し、使節の上陸を護衛す。上陸して「ヤント」クリエアの會所に至り、此所には「モルゲメーストル」及諸有司、使節並士官を坡上に迎へ、王命を述べ、應接終て馬車に乗り、鐵路會所に至り、蒸氣車にて「ス・ガリアン」の鐵路會所に至る。此所には「ヘンゲ」の武官送迎をなせり。會所より又馬車に乗り旅館に着す。會所より旅館に至る路の兩傍には四バタイロン歩卒を以て護衛す。「ロツテルダム」ス・ガリアン「ヘンゲ」兩府には、盛に日本荷蘭の旗幟を立てり。就中初「ロツテルダム」に着せるとき「ヤント・キエル」會所の坡上及「ヘンゲ」の旅館「スレウ」の前には旗を建て、三使節の紋を記し、其下に日本文字にて和蘭京は日本尊客の爲に恭迎と誓せり。國外記入旅館「Bevrie」

十八日 15  
十九日 16  
此日王妃の誕日なり。夜林樹の間に萬燈を設けて日本人を迎ふ。旅館にも戶外に燈を張り樂を奏し、十二時に至り罷む。國外記入和蘭船中は終始天候あしく、寒風六十里内外なり。

二十日 17  
二十一 18  
二十二 19  
二十三  
二十四  
二十五

注 以下木蘭の月日の記入がなくなつてゐる。